スペイン内戦文学：
ペラ・カルデースの戦争体験記
—あるカタルーニャ人兵士の視点—
（抄訳）

アルベルト・ミヤン・マルティン

【解説】 本稿は、ペラ・カルデース（Pere Calders, 1912-1994）が著した戦争体験記 *Unitats de xoc*（『突撃隊』）を抄訳したものである。カルデースは、バルセロナに生まれ、1930年代に短編小説をはじめイラストや新聞記事などの諸分野で評判を得ていたため、1936年7月にスペイン内戦が勃発したとき、既に前途有望な作家となっていた。フランシスコ・フランコ（Francisco Franco, 1892-1975）が率いる右派の反乱軍によるクーデターが起こってから数週間後にカルデースの長男が生まれたにもかかわらず、カルデースは翌年に第二共和国政府の人民戦線軍に義勇兵として入ることにした。小銃兵隊の一員としてテルエルの戦い[1]が始まった際に動員されたが、戦争が終わる前にフランスを経てメキシコに亡命した。二十年以上の亡命生活を送りながら「魔術的リアリズム（magical realism）」に満ちた短編小説などでカタルーニャ語文学に貢献し、ようやく1962年に帰国した。晩年にバルセロナ自治大学から名誉博士号を贈呈され、カタルーニャ州自治政府のジャーナリズム賞をはじめ多数の受賞を重ねた。

カルデースが自分の戦争体験を綴った*Unitats de xoc*の初版は、1938年にEditorial Forjaから出版された[2]。古典文学者のカルラス・リバ（Carles Riba, 1893-1959）による序文が書き添えられ、各章の表紙としてアンリック・クルゼリャス（Enric Cluselles, 1914-2014）の挿絵も盛り込まれていた。1983年にEdicions 62から刊行された版には、著者による「45年後」と題する後書きが加えられた[3]。この後書きを読めば、次のことがわかる。

『ＧＲ—同志社大学グローバル地域文化学会 紀要—』3, 2014, 71－90頁.
同志社大学グローバル地域文化学会 ©アルベルト・ミヤン・マルティン

まず、カルデースが配属された部隊を「突撃隊（unitats de xoc）」[4]と名付けたのは、スペインに密航して共和政側の義勇軍に加わったポルトガル軍の上級士官であった。カルデースの回想によれば、スペイン内戦においてはファシズム陣営の支持を得た反乱軍が勝利を収めると士官は確信していた。但し、スペイン内戦は第二次となる世界大戦の前哨戦であり、次は反ファシズム陣営の連合軍が戦争に勝つことも確信していた。このような見解は、戦場のカルデースの考えにも影響を及ぼしたに違いない。ちなみに、イラストや地図作成の得意なカルデースを製図技師に任命し、未経験の兵士に地図解読を教える仕事などを命じたのも、このポルトガル軍の士官である。

さらに、『突撃隊』というタイトルは誤解を招きかねないため、カルデースは本書の再出版に対してずっと抵抗感を持っていたこともわかる。確かに、C・リバの序文に書いてある通り、この本は「厳密に言えば、戦争のドキュメンタリーではない。戦時中の男たちが、戦時中の別の男たちを観察しながら送る日常生活〔のドキュメンタリー〕である」[5]。また、様々な文芸評論家や歴史学者の指摘によれば、本書は大言壮語的な戦闘記述を含めず、「控え目な口調の個人的な叙述」となっている[6]。戦争の恐ろしさへの批判や、平和を願う言葉がしばしば散見される。本書は戦記ではないのに『突撃隊』と題された理由については、カルデースは次のように述べている。

> この本のタイトルがその内容に対しては不正確な表現であることについて、次のように説明できよう。本書の文章は私が軍服を着た兵士として書いたものであり、軍事検閲を受けなければならなかった。つまり、自分が見たものや経験したことのすべてを語ることは禁じられていたのである。さらに忘れてはならないのは、この原稿は戦争の最中に出版されたこと、つまり、軍事検閲の他にも社会的、政治的な検閲が行われており、しかもそれは徹底した検閲であったことである。
>
> ここで何かを正当化しようとしているわけではない。時々、インタビューの流れの中で、私が共和制支持の元戦闘員であることに言及されるのだが、私はカタルーニャを頭と心の中に置いた、ただの兵士にすぎなかったと、いつも答えている。[7]

これは、カルデースから直接に当時の執筆環境や戦時中の自己の心境の詳細が読み取れる貴重な文章である。フランコ死去の1975年以降のスペインでも（そして現在でも）、有名人が時々質問されるのは、自分または自分の親戚が内戦の交戦期間にどちら側についたか、それと、その事実に関する今の気持ちや感想がどのようなものかということである。「どちら側か」と言えば、フランコを中心とする反乱軍、それとも共和国政府を支持する人民戦線軍のことであり、それぞれ民主化してからの「右派」と「左派」と単純化して関連づけられることが多いため、慎重に用心深く答えるべき質問である。但しここではカルデースが問題にしているのは、戦争に勝って独裁体制を敷いたフランコの反乱軍と、当時の現政権を守ろうとしたが敗北した共和主義側の対立ではない。内戦が勃発する以前からカタルーニャの「民族自決」[8]を主張する諸政党の党員として活動していたカルデースは、自分の参戦経験について聞かれたとき、ひとまず自分を「カタルーニャのために」戦った一人の戦士として位置づけてきたことを主張している。つまり、本人が自分を顧みてみれば、反ファシズム陣営の兵士として戦争に参加したことは、副次的な問題となってしまうようである。

本書を読んでいくと、確かにカルデースのカタルーニャ人としての意識が強いことは確実にわかる。ただし、カルデースには戦争体験記にプロパガンダ的な政治主張を込める意図はない。「カタルーニャ（民族）」やカタルーニャ人としてのアイデンティティに関する記述は、彼のありのままの気持ちを表すものであり、スペイン内戦という悲劇の最中で一人のカタルーニャ人の心境が自然に、そして如実に語られているものである。彼が思いつきのままに綴っていくその心境や精神状態は、同時代の一部のカタルーニャ人の集合的意識を反映していることは、言うまでもない。

スペイン内戦の戦争体験記では、人民戦線側の義勇軍に志願して反乱軍と戦ったジョージ・オーウェルの『カタロニア賛歌（*Homage to Catalonia*）』などが有名であるが、スペイン人の兵士が書いたものはほとんど存在せず、しかもあまり知られていない。本稿で扱うカルデースの*Unitats de xoc*は、戦時中に出版された点でも貴重な資料であるが、英語にも完訳されていない。

本稿では、翻訳に当たっては紙数の都合上、日常的なエピソードや逸話を

扱う原書の大部分を省き、「カタルーニャ民族」の一員としてのカルデースが文章に現れる部分のみ抄訳した。本稿で提供する翻訳は、歴史学、文学、地域研究、グローバル・スタディーズなど多様な分野の学者の立場から、カタルーニャを含むヨーロッパの地域における現在の様々な政治的社会問題の歴史的背景の理解や検証に役立つ資料となれば幸いである。

【凡例】

1. 便宜上、抜粋して翻訳した部分には（一）～（十六）の番号と、その内容を簡単に紹介するタイトルを付けた。数行だけ省略した場合は、《中略》と表記した。なお、各部分の下右に原書におけるページ数の表示を付して出典を明記した。
2. 原書は十二章からなっている。本稿で一部も訳出していない章は次の通りである。第2章「死んだ家」（«La casa morta»）、第6章「突撃の部隊」（«Brigada de xoc»）、第10章「テルエル」（«Teruel»）。なお、原書では章には番号が振られていない。
3. «carrabiners» というものは、元々は十九世紀からスペインに存在した税関検査官・沿岸警備官・国境警備兵の部隊であったが、内戦が始まってから戦争に加わるようになった。隊員は、三分の二ほど共和国政府を支持し、戦争中にその数が一万から四万まで増えた。本稿では、語源を考慮に入れて「小銃兵」と訳した。
4. «ciutadà»（英語の «citizen» に該当するもの）は、場合によれば単なる「住民」、「～人（外国人・カタルーニャ人）」の意味と考えられるが、内戦時代における重要なキーワードなので、一貫して「市民」と訳した。
5. 可能な限り «país» を「国」と訳し、«terra» を「地・土地」や「故郷」と訳した。«el nostre país»（我が国）や «la nostra terra»（我が故郷）のような表現は、ほとんどの場合カタルーニャを指す。特別の政治的意図を持たずに、自然に使われていることが多い。
6. «casa» という単語は、冠詞が付かない場合は英語の «house» より «home» を意味するような用語であり、«homeland» のニュアンスが強い。こうい

う場合は、«casa» の意味範囲が「家」から「故郷」や「国」まで拡大して[9]、「帰郷する」「帰国する」の意味でも使える。明らかに「家」を指す場合（例えば「家族の元へ帰る」の文脈など）に「家」と訳し、文脈から «homeland» の意味だと判断した場合は、「故郷」や「国」などといった訳語を使うようにした。なお、«casa nostra»（直訳「我々の家」）は「我が故郷」と訳した。

7. «raça» という用語は現在「人種」の意味であるが、本書が書かれた当時はまだ「民族」の意味でも使われていた。本稿では、カタルーニャ人などを指す場合「民族」と訳し、現在の意味で使われる「人種」と同じ解釈ができる場合、「人種」と訳した。なお、«poble» や «nació»（英語では «people», «nation»）にも、訳語として「民族」を当てた場合もある。しかし、«nació» が「国家・政府・国民」を合わせた意味で使われていると判断した場合は、「国」と訳出した。
8. カルデースは、他の軍人の言葉や印刷物を引用するとき以外、«Espanya»（スペイン）という単語を使うことが非常に少ない。ほとんどの場合は、スペイン全体のことを «Península»（「半島」：イベリア半島）と呼んでいる。または、「この国」を意味する «aquest país» もたまには使っており、これはカタルーニャを指して使っているときと混同しやすい。
9. 本書の大部分は一人称複数で語られている。それは「戦場にいる小銃兵＝登場人物たち」の意味で使用されているときは「私達」と訳し、「カタルーニャ人」を指していると文脈から判断できる場合は「我々」と訳すように心がけた。
10. 解説・凡例中の注は、文章に数字を付して示し、末尾に「注」として掲げた。
11. 翻訳文中の注は、文章に☆と数字を付して示し、末尾に「訳注」として掲げた。

第一章：「新兵徴募所」（«Base de reclutament»）

（一）〈兵士であること〉

私達は軍用列車でバルセロナから出発した。国際旅団に編入しに来た外国の市民が車内の大部分を占めている。《中略》私達は五人とも皆製図技師で、小銃兵隊の突撃グループに入隊するつもりだ。カスタリョー基地[☆1]のカモフラージュ部に配属されている。《中略》

私達はなかなか互いに認めたがらないのだが、バルセロナからは意気消沈して出発した。元の市民生活にいつ戻れるのかわからない。むしろ、その愛しい市民生活に戻れるかどうかもわからない。これからは、幻想を抱く仕事に当たっては他人の意思に頼り自分の意思を捨てる必要があるだろう。私達は今自分たちの人生に一時休止期間を挟み、その人生の一時的停止をしばらくそのままにしているような気がする。これは私達の希望を切り離すナイフのようなものであり、私達のすべての感覚を完全に鈍らせ、私達を鈍感にしているものだ。

（pp. 17–18）

（二）〈バレンシアの印象〉

少しずつ夜が明けてきた。平らに並んでいる田は、それらを通り抜ける列車の進行に合わせたスピードで私達から遠ざかっていく。バレンシア地方に入ってからはかなりの時間が経ったけれども、光が周りの景色とその特徴的なところを照らし始めた今、私達はある事実を確認した。つまり、この土地のすべてのものは、カタルーニャと比較すれば、小規模だということ。田舎の建物は小さくて、高さで普通の樹木にも劣ることが多い。道が狭ければ、灌漑（かんがい）用の水路も狭い。車も馬も、また小さい。

私達はこの地に偏見を抱いているわけではない。上に述べたような印象はさておいて（ちなみにそれは何らか恥じ入るべきものではないと思うが）、ここは実を言えば非常に美しい場所だ。

（p. 20）

（三）〈小銃兵隊はカタルーニャ人が多い〉

私達は本当に出かけて散歩したい気分になっていた。自分たちが兵役に就いていることを非常に特別なことだと感じ、街の人々もそう思ってくれるだろうと信じていた。「私達みたいな小銃兵はこんなところになかなか来ることがないだろう。だからみんな気づいてくれるだろう」と考えたわけだ。

部署での配属が決まるまで数時間空いていたので、全員で街を訪れ、誇らしげに軍人の姿を見せることにした。

その後、私達は誰からも注目されていないことに気づき、この基地に小銃兵が多すぎてもう街の人々を驚嘆させることができないと確実にわかったから、カタルーニャ人小銃兵のたまり場になっていると聞いた喫茶店の方に向かった。そこで思ってもみなかった事実が発覚した。カタルーニャ出身の小銃兵が多い。小銃兵隊が最前線に派遣したほとんどの大隊には、支配的な役割を果たしているカタルーニャの市民がいる。

（p. 24）

第三章：「歴史的道路」（«Les rutes històriques»）

（四）〈国を離れて戦う人々の気持ち〉

朝早くに、私達を激しく動揺させる知らせが入った。エブロ川の氾濫により、我が故郷南部の非常に広い区域が浸水したそうだ。東部地方[☆2]とカタルーニャの間の連絡網が遮断されている。だから、ここは我が国から数キロメートルしか離れていないのに、今のところは帰ろうと思っても帰れないことがわかった。道路や鉄道が広範囲に亘って浸水地帯となっており、六日前からカタルーニャからの新聞も手紙も届いていない。

心が痛んでいる。バレンシアの日中の明るさや薄い空気は、重圧感を引き起こしながら息が詰まるほど私達を苦しめている。これまでは深く息を吸いたと思わせたオレンジの花の匂いは、今は私達を囲んで圧迫の輪を狭めていく。どうしても逃れられない。

全員が街の通りを機械的に歩いている。ゆっくりと歩き、あまりにも元気がないため腕を垂れ下げている。手の指先が地面に当たりそうなほどだ。そ

れでも、できれば走りたい、小道や道路をあちこち飛び回りたい、水面の上を飛びたい、自分たちが興味を持っている唯一のルートを辿りたいと、私達は思っている。私達は戦争から逃げようと思っているわけではない。ただ、戦争は自分の国で戦いたいものだ。そして、私達は英雄の気持ちを呼び覚ますその自分の国から戦争に参加したい。マドリードの人々が思わず羨ましくなる。彼らは自分の都市を守っているだけでなく、それぞれの家までも守れる状況に置かれている。私達は時にはそのようなエゴイズムにより少し恥ずかしくなり、そのときにかえって胸を膨らませ身体が大きくなる。そしてそうすることで、垂れ下げていた手が地面から離れる。

（pp. 39–40）

（五）〈敵対関係〉

戦いを恐れている者は一人もいない。憎しみが募り、明確な形を取りつつある。私達はこの戦争における敵対関係を既に正確に知っており、恐れているものがあるとすれば、それはこの戦争が幅広い意味合いになってしまうこと、それから、私達がこの戦争に自分らしく参加できなくなることだ。☆3

ファシストたちは目的に到達することが絶対にできないだろう。それは皆確信している。ただし、彼らが我が故郷につながる道路を封鎖しようとしていることを知ると☆4、私達の心の中で私達に負わされた歴史的責任の意識が大きく育つ。戦争はリミットがほとんどないもの、人道的なルールにも従わないもの、そのような気もするけれど、現在彼らがしようとしていることは、極悪非道に思える。この基地のカタルーニャ人小銃兵にとっては、戦争は今になってから始まったかのようだ。

（p. 41）

（六）〈カタルーニャ人のユーモア〉

仲間がカタルーニャの写真入り新聞を手に入れることができた。第一面にはランブラ・ダ・カナレタス☆5の写真が載っていた。彼はその一枚を切り抜いて、兵舎の寝室へと入るドアに貼った。そう、その紙切れ一枚には、私達の熱望や夢を表しているものがすべて凝縮されていた。夏日のはっきり撮

れた写真だった。木々には葉が生い茂っている。人々は薄着をして、道を散歩している。記者は、写真の隅に麦藁帽子をかぶった市民の姿を捉えている。なんという懐かしい光景だ!

《中略》

写真の前で輪を作りつつ、私の周りに同じ所属部のカタルーニャ人たちが集まった。皆にとって最も感動的なものは、写真の主題になっていると言える路面電車の姿だ。どうしてもバルセロナの路面電車が現地で見たいから、その光景を見せてくれる人がいれば、右手の指を二本切り落としても構わない、とまで言う青年がいた。

ほとんどの場合彼らは、家を離れてからもうすぐ十二ヶ月になるところだ。彼らは皆でその青年に共感して感傷的になっていることはそれぞれの表情から読み取ることができた。気まずい雰囲気が漂っている中で、こういったときに私は自分の果たすべき役割を自覚した。写真をもぎ取り、そわそわしながら細かくちぎった。周りの人に邪魔されないように反応できる時間を少しも与えなかったつもりだが、三人か四人の仲間たちが説明を求めるかのように近寄って来た。結局、その新聞の一ページの持ち主に腕をつかまれて、手できつく握り締められた。突然、このような状況の滑稽な一面を見抜いた誰かが、その一面を皆に知らせるために笑い出した。偽りのないその笑いが部屋を満たして、全員の心を奪った。こういうのは、とてもカタルーニャ人らしいユーモアのセンスを現す、無意識な行為だ。それは、どんな戦地でも危機的な状況を切り抜ける力を持っている。将校たちはカタルーニャ人のユーモアを理解し、その価値も評価している。中には、それを使ってみたら成功を収めた人まで存在している。

（pp. 41–43）

（七）〈外国人とカタルーニャ人〉

ベニカシム[☆6]に行って来た。国際旅団の戦傷者のために小屋の建設を計画するためだった。そこに行く途中で、指揮を執っている士官から、以下の話を聞いた。旅団のメンバーは小銃兵の総合的な価値をとても好意的に評価しており、私達の突撃隊が関わった戦いの話も知っているそうだ。ポソブラン

コ、ブリウエガ、ベルチテ…☆7、突撃隊の参戦が勝利の決定的な要因となったすべての戦いだ。

さらに、優れた資質を持つ彼ら外国人は、カタルーニャ人を高く評価しており、戦争に際して秀でた能力があることを認めてくれていると聞いた。だからベニカシムには、せっかくのいい評判がどちらの意味でも☆8悪くならないように、胸を張って毅然とした足取りで入場しなければならないと感じていた。自分の人生の中で、高い身長とがっしりした胸の持ち主ではないことを一番残念に思ってしまった瞬間だった。民族の誉れが自分にかかっているような気がしたから。

道の途中で、戦争で手足を失った人や負傷者の集団を初めて見た。彼らは地球のあらゆるところからやって来ていた。北の背の高い人…、彼らは金髪で、純白な顔に清純さが窺えた☆9。南のやせっぽちの人…、彼らは活動的で、誰よりも早く起床して、誰よりも早く添え木や松葉杖から自由になりたがっていた。意外にも一人の黒人も見たし、エキゾチックな人種☆10の代表となる人も何人か見た。

これらの男たちは、根強い人種の違いに隔てられているのだ。我が国とは交流の歴史がない国からも、人々の集団が来ている。しかし彼らは皆、我が国の土の上で団結するために来て、両手を広げて心を開いてくれた。私達は、兄弟である彼らと、血縁のつながりより深い絆で結ばれていると感じている。感謝の気持ちを涙ながらに伝えたいけれども、できない。この戦争で私達の涙はもう枯れてしまったからだ。

多数の歴史的軍事用道路を辿ったことによって、これらの男たちは自分たちのそれぞれの家から切り離されている。彼らの多くは、もう家に帰ることはないだろう。彼らは我々の空の下で率直な表情を浮かべ、微笑みながら一刻も早く元気を取り戻そうとしている。結局は、彼らはまた命の欠片を我々の戦地に残すことになる。

私達は以前の私達の脆弱さを今恥じている。自分たちの辿った歴史的道路は、私達を故郷から切り離してしまうかもしれないけれど、細くて不鮮明で、たいしたことがないものに見えてしまう。ここで公然と世界に表明したい。我々カタルーニャ人は、広い心を持って胸を張って帰郷することができない

限り、急いで故郷に帰るつもりは一切ない。

（pp. 43–44）

第四章：「警察業務」（«Servei de policia»）

（八）〈カタルーニャ人の名声：その一〉

交差点に着くと、思いがけずに将校の集団とすれ違った。その中に基地の指揮を執っている中佐もいた。私達は不動の姿勢を取り、少し不安になってかかとを鳴らしてから、できるだけ規制に従ったかたちで通過しようとしたが、具体的な命令に止められた。

「そこの小銃兵たち! この通りの出入り口に立って、人を通すな。絶対に誰も」

命令の対象は、小銃兵の五人。カモフラージュ部に属する製図技師の私達三人と、連れの若い女性たちへのなさけないナンパに没頭している二人の青年。

とりあえず命令を前向きに受けた。通りを占拠し、できるだけ効率的に列に並んで立った。五人ともどちらかと言えば身長が低く、体型を武器にして権限を行使するべきならば、この任務に指名されたことは間違いのはずだった。しかし、私達はやる気があって自分たちがとても重要だと感じている。小銃兵隊全体の名誉が自分たちに与えられたかのように。

五人で作った壁を通り抜ける者は一人もいなかった。グループの中でカタルーニャ人である私達三人は、通行人にカタルーニャ語で軍事命令を知らせていた。立ち去る人は、相手に「カタルーニャ人だ」とささやくことは何度かあった。我々は何らかの名声があるらしい。☆11

（p. 52）

（九）〈カタルーニャ人の名声：その二〉

私は、交通警察のような業務において作法を失念して、人の前でちっぽけで怒りっぽい軍人の役割を果たすことが楽しくて望ましく見えてしまった。同部の製図技師である我が友の二人も、同じような振る舞いをしてしまって

いた。そこで、皆で集団的反応を引き起こしたかたちで、同じ瞬間に自分の振る舞いに気づき、その振る舞いをしたことを残念に思ってしまった。

私達は同時に態度を正した。すぐに説得力のある礼儀正しい態度を示し、無意識にカスティーリャ語で話し始めた。これからは、交通警察というさじ加減の難しい仕事において犯す過ちを、私達カタルーニャ人が持つ民族性のせいにされたくないからだ。個別に人々に話しかけ、軍事命令の内容と、それに従うのに必要な忍従と服従の精神を説明して、善意を持って行動してくれれば得られる褒美についても説得し始めた。その褒美は、戦時中に自分が模範市民であると心の中で満足に思えることだと説いた。

（p. 54）

第五章：「軍事演習」（«Maniobres militars»）

（十）〈また戦場でカタルーニャ人と出会う〉

次に、皆は小隊に分けてそれぞれのトラックに乗り始めた。私達はわからないことが一つあるため自分たちのトラックに乗る前に近くにいる将校に相談することにした。マキシム機関銃☆12の重機関銃隊長であるその将校に、私達は恥をかかないように綺麗なカスティーリャ語で話しかけた。しかしながら、話の途中で将校が口を挟んでこう言ってくれた。

「大丈夫だよ。私もカタルーニャ人だ」

それは意外な出来事だったけれども、初めてではない。基地の保険部長、カモフラージュ部長、大隊の少佐、軍曹・伍長の士官学校の教官たち何人かなどと話したときも、同じ経験をしている。軍隊の中でそういうことが起きても、もう意外なことではない。小銃兵隊再編成の推進運動がカタルーニャから始まったため、最初の突撃隊には数百人のカタルーニャ人が含まれている。

全員がトラックに乗ってなんとなく座席に収まってから、同じ車内にある別の小隊の小銃兵の一人が私達に向かって言った。

「君たちもカタルーニャ人ですよね? 僕もそうですよ。プラサ・ノバ出身! 一年も帰ってないですけど…」☆13

彼は、私達がバルセロナから来てから数週間しか経っていないと聞くと、いろいろ確認したがって街の近況やばかげた噂について私達に尋ねた。それから、我が市の現実の状況を知らされることで、非常に満足してとても安心したようだった。

（pp. 61–62）

第七章：「攻撃」（«L'ofensiva»）

（十一）〈カタルーニャの義勇兵よ！〉

私達はこれまで静かに、下を向いて歩いてきた。意気消沈した状態だった☆14。それであきらめて運命を甘受することにして、皆ほぼ同時に反応した。まず、工兵の一人が声の調子を整えてから歌い出した。すると兵士たちは皆歌声を揃えて、歌が大隊から大隊へ移っていった。

しかし、将校たちに黙らせられた。静かになると、軍装備品がさらに重たくなった。そこで仲間の一人が私に近づいてきて、聞き覚えのある詩を暗唱してくれた。

Que deu ser brau, i ardent i fort,	きっと勇猛で強く、情熱で溢れている
el vostre cor,	おまえたちの心
oh voluntaris catalans!	カタルーニャの義勇兵よ!
Cap llei escrita us obliga	法律がおまえたちに強いているわけではない
en terra estranya a guerrejar,	見知らぬ土地で戦うことを
i, generosos, guerregeu	それでも自らの聖なる意志で
per vostra santa voluntat,	自分を犠牲にして戦っている
sedents d'amor i llibertat,	愛と自由を渇望して
del tot segurs que vencereu.	勝利することを確信して☆15

こうなると、歩く道が短く感じ、自分のことも簡単に忘れられるようになる。詩は、縦列から縦列へささやきのように広まっていった。

（p. 94）

第八章：「第十四大隊」（«El batalló 14.è»）

（十二）〈戦争が終わったら…〉

小銃兵の全員、とりわけ私達カタルーニャ人は、第十四大隊[☆16]を高く評価し、尊敬している。《中略》

第十四大隊の隊員たちは、もうすぐカタルーニャで休暇期間を過ごせるという約束をしてもらい、子どものように顔を輝かせている。その中にリェイダ[☆17]の青年がいて、ある日こう言ってきた。

「実はね、カタルーニャに帰れるなんて、本当に嘘みたいです。僕にとっては帰る願望はあまりにも強くて、世の中で一番やりたいことを選んでくれと言われたら、もう一度自分の国を眺めることを選ぶのですよ」

私達は彼らほど軍隊に編入してから長くないから、故郷の話をしてあげるととても喜ばれる。彼らは幼稚な、少なくとも後衛部隊の人から見れば幼稚な質問ばかりをしてくる。バルセロナのあの通りはまだ敷石が敷かれているかとか、カタルーニャ広場にはまだ鳩がいるかとか、映画館では最近の映画を上映しているかといった質問だ。バルセロナの話をすると、すぐに温かい気持ちになる。そのあと会話の流れは、将来を達観する哲学的な余談へと変わっていく。戦争が終わったら、私達はどのような役割を担うことになるかについて、いろいろ予想してみる。もう死ぬまでずっと小銃兵として生きるしかないだろうと思っている人がいる。彼らによれば、我々はそのときにもう戦闘民族になってしまっているため、貿易や農業で生活している民族があると同様に、我々は戦闘で生活することになるだろう。また、別の人によれば、我々は将来に、今戦って獲得しようとしている文明社会のもとで、第一級の市民[☆18]になることができるだろう。それでも大抵の人は、明確な見解を持たなくて、あまり考えないようにしているようだ。

（pp. 98–99）

第九章：「エスカンドン峠」（«“Puerto Escandón”»）

（十三）〈胸に秘める愛国心〉

少佐もカタルーニャ人で、非常に良い人だとわかった。車のエンジンをかけてからすぐに、私達に向かって振り返り、軍服の上着の襟を折り返して金属のバッジを見せてくれた。四本縞[☆19]と「CATALUNYA」という文字が刻まれている記章で、我々の兵士のほとんどが付けているものと同じだ。「これがなければ、喜んで戦争に行けない。子どもっぽいだろう?」と少佐が尋ねてくると、私達は「そんなことはありません」と答えた。これほど本心から発言をしたことはそれまでなかった。

（p. 106）

第十一章：「戦線」（«El front»）

（十四）〈民族の兄弟〉

私達は必要な場合に、楽観的になる余地が残り少なくなっているという瞬間に、どの状況においても滑稽な面を見抜いて浮き彫りにする方法を見つけ、皆で腹を抱えて大笑いできるようにしている。こういう姿勢を取ることができて本当に幸運なものだ。カタルーニャ以外の場所で戦争をしているすべてのカタルーニャ人にとってもそうだろう。戦地のあらゆるところで民族の兄弟に出会い、彼らも同じ気質を持っていること、そして、絶望を克服して短時間で対応できる私達と同じ能力を持っていることが、わかった。

（p. 131）

第十二章：「最前線」（«La primera línia»）

（十五）〈歴史を動かす人々〉

もし私達が死んで、誰も私達の犠牲的な行為に気づいてくれなかったら、なんて恐ろしいことだろう! もし私達がカタルーニャから離れているこんな

ところで埋められ、誰も嘆いてくれなかったら、なんて恐ろしいことだろう!《中略》

我々は、自分たちの心をさいなむ出来事を超越して、我々の国にとってだけでなく、ヨーロッパのすべての国にとっても重要たる歴史的変遷過程の進度を早めるのに選ばれた世代であることを最高に誇りに思っている。我々が世界中から注目を集め、世界的な時事問題の中で優先的な役割を果たしていることを考えると嬉しくなる。自由を愛するすべての国々は、我々の行っていることの価値を評価し、他の民族が恐れて回避している闘争を熱心に続けている我々を優越した民族として敬服していることも考えると嬉しい。☆20

上記のようなことを、皆は明確に意識している。無教養な人も、読み書きのできない人も、政治的教育を受けていない人も、誰もが自分たちが地球で最良の若者であることを自覚している。我々は、我々と肩を並べ立ち上がらない世界のプロレタリアの人たちに赤恥をかかせ、不干渉政策を採った民主主義国にも後悔の念を抱かせている☆21。そして、自由を求める精神を持つ市民に自分の良心と葛藤するようにさせ、その精神を裏切っていることに気づくようにさせている。

（pp. 142–143）

（十六）〈ヨーロッパに捧げる希望〉

遠くからカタルーニャの歌が聞こえて来て、私達の心が明るくなった。《中略》

もうすぐ最高の稜線に着くところだと思ったら、突然、山道を曲がると地平線が無限に広がり、私達の足元に膨大な景色が見えてきた。山を下ったところに、動き回る黒い点々の横線によって土地が二つに分けられている。我々の最前線だ。そこから先は、すべてまだファシストたちの支配下にある地域だ。乾燥した暗い土地で、抑圧されている。我々の足跡と、我々の側にある正当性の光が来るのを待っている。

最前線は勇敢に進路を維持している。毎日戦って毎日破れて毎日再生するという、生きた戦線だ。そこにいる男たちはヨーロッパの一流の市民で、我々が世界にできる最大の貢献だ。それに彼らは我々の誇りと、我々の栄光

だ。

どんなことが起こっても最前線は進行し続けるだろう。野原と森を覆って広がり、川と湖を越えて広がり、身近な山に登ってから遙かなる青い山脈にまで広がり、さらにその彼方へと広がるだろう。彼らは、いつまでも胸を張って毅然とした足取りで地球の最も暗い片隅にまで自由と生きる権利を届けながら、世界が歩むべき道を示してくれるだろう。☆22

（pp. 147–149）

注

1 テルエルの戦い（Batalla de Teruel）は、1937年12月から1938年2月にかけてアラゴン州のテルエル市内外で行われた戦闘で、最初に大勝利を収めた共和国軍の占領に続いて、反乱軍による再奪還で終わった。スペイン内戦の中で主要戦闘の一つである。

2 カタルーニャの代表的な新聞「ラ・バングアルディア（La Vanguardia）」1938年6月12日（日曜日）の11頁で、他の書物と並んで宣伝されていることが確認できた。「カタルーニャ語文・値段10ペセタ」との表記もある。

3 本稿の原書として、2010年に出版された次のものを使用する（なお、再出版された原稿には一切の修正も加えられておらず、内容は初版と全く同じであると、1983年の後書きでカルデースは述べている）。Calders, Pere. *Unitats de xoc*. Barcelona: La Magrana, 2010.

4 この後書きで、「突撃隊（unitats de xoc）」と名付けられた部隊は、実はゲリラ部隊のようなもので、現代用語でいうと「奇襲部隊」や「特殊部隊」を意味する「コマンド」が最も相応しい名称であると、カルデースは述べている。

5 Calders　前掲書、13頁。

6 Campillo, María. “The Spanish Civil War in Catalan narrative.” *Catalan Historical Review*, vol. 4, pp. 121-135. Barcelona: Institut d’Estudis Catalans, 2011.

7 Calders　前掲書、154頁。

8 英語の«self determination of peoples»の定訳。アメリカ大統領ウィルソン（Woodrow Wilson, 1856-1924）の「十四か条の平和原則」（1918年）で注目を浴び、ヴェルサイユ条約（1919年）や国連憲章（1945年）などで認められるようになった。バスクやカタルーニャの場合は、それらに「民族（people=nation）」の定義が当て嵌まるかどうかの議論が続く一方、「自決」とは具体的に高度の自治権（autonomy）

を指すのみの意味か、それともスペインからの独立（independence）を最終目的とする意味か、曖昧な概念となっている。そのため、「民族自決」を主張する個人や集団や政党は、どこまでの「自決権」を求めているかは明かではない場合もある。

9 その関係で、例えば、英語の «domestic» には元々の「家庭内の」の意味と、それから派生した「国内の」の意味がある（なお、«domestic» の語源はラテン語の «domus»（家）である）。

訳注

1 カスタリョー（Castelló）は、カタルーニャ南部に接するバレンシア北部の県。スペイン語表記はカステリョン（Castellón）。ここでその県都であるカスタリョー・ダ・ラ・プラナ（Castelló de la Plana）のことを言っている。この市の基地で、1937年の夏から新しい突撃隊の編成が始まっていた。小銃兵の作戦は、地中海に沿ってカスタリョーまで下り、そこから隣のテルエルに進入することであった。

2 原文の«Llevant»（「日が昇る方角：レバンテ地方：地中海東部地方」）という用語は、スペイン国内では普通はバレンシアおよびムルシアの両州を指す。東北にあるカタルーニャが含まれることはない。

3 反乱を起こしたのは、イタリアやドイツからの全面的な支援を得ていた軍隊の大半であったが、すぐに影響力の強い上流社会階級、政治的経済的権力層、大土地所有者、カトリック教会の九割方などからも支持を得た。一方では、反乱者から現行の政体（第二共和政）を守る側は、労働者階級（プロレタリアート）の教養・知識層、下層中産階級（プチブルジョア）の進歩主義層、イベリア半島中部高原以外の地域の農民階級、ソ連やメキシコの支持を得た軍隊の一部、そして学者や芸術家などの知識階級であった。このように、スペイン内戦は社会階級をも意識する「イデオロギーの戦争」となり、世界からもそう見なされていた。

4 将校から得た情報によれば、フランコ軍が歴史的軍事用道路を辿って、テルエル県のアルカニス（Alcañiz）から地中海まで進み、カタルーニャとバレンシアに跨がる地域を占領することで両州間の連絡網を遮断する予定であった。バレンシアはまだ、共和国派の勢力圏であるスペイン東南部やマドリードの共和国軍との連絡が保てるが、カタルーニャは完全に切り離されることになる。結局、この文章が書かれた数ヶ月後の1938年4月中旬に、フランコ軍がバレンシア北部のビナロス（Vinaròs）を占領し地中海の海岸まで辿り着いたことで共和国政府統治地域は南北に分断されてしまった。さらに6月にフランスが国境を閉鎖し、孤立させられたカタルーニャはその後の攻撃に耐えるのに苦労した。

5 ランブラ・ダ・カナレタス（Rambla de Canaletes）は、バルセロナの中心部から

臨海地区まで続く繁華街・ランブラス通りの一部である。カタルーニャ広場から始まる、港から最も遠い区域であり、カナレータスの泉があることで知られている。

6 ベニカシム（Benicàssim）は、カスタリョー県の町。二十世紀初頭から観光地として発展していた。スペイン語表記はBenicasimとされている。

7 ポソブランコ（Pozoblanco）はアンダルシア州コルドバ県の町。1937年3月～4月にポソブランコの戦いで共和国軍が、米西戦争や第三次リーフ戦争で戦った将官ケイポ・デ・リャノ（Gonzalo Queipo de Llano, 1875-1951）が率いる反乱軍に最後まで耐えて勝利を収めたことで有名である。ブリウエガ（Brihuega）は、マドリードに接するグアダラハラ県の町で、共和国軍や国際旅団が反乱軍およびイタリア軍を後退させることでマドリードへの進撃を阻んだグアダラハラの戦い（1937年3月）の重要な舞台である。ベルチテ（Belchite）は、アラゴン州サラゴサ県の小さな町で、ベルチテの戦い（1937年8月～9月）で町全体が破壊され、現在はゴーストタウンとなっている。

8 小銃兵としての評判とカタルーニャ人としての評判の意味と考えられる。原文では「二つの評判（doble fama）」と書いてある。

9 原文は«gegants del nord»（「北の巨人」）とあり、ここでは「北」は広義の「北欧」を指している。また、原語の«candor»には、「純白」と「清純」の両方の意味がある。

10 おそらく東洋人のことを指す。国際旅団には100人程度の中国人が参加したと思われている。

11 カルデースとその仲間たちがここでカタルーニャ語を使っているのは、バレンシアでは一般的に「バレンシア語（valencià）」と呼ばれてきたカタルーニャ語の方言が話されているからである。カタルーニャ語文化圏は他にバレアレス諸島、アラゴン東部（以上はスペイン国内）、アンドラ公国、フランス東南部、イタリア・サルデーニャ島のアルゲーロ市などを含む。

12 マキシム機関銃（Maxim gun）は、史上初の全自動式機関銃として有名である。主に第一次世界大戦まで使われていたが、1930年代にもなってスペイン内戦に登場するのは、日露戦争のときにロシア軍が大量に投入し、後のソ連が共和国の支援国として内戦初期のスペイン政府（第二共和政）に輸送したからであろう。

13 プラサ・ノバ（Plaça Nova）は、バルセロナのサンタ・エウラリア大聖堂の近くにある広場とその周辺の地域。都心部の繁華街に近い。

14 本章では、人民戦線がテルエルを占拠したことへの言及がある一方、バルセロナが破壊的な空襲を受けたこともカタルーニャ人小銃兵は知らされている。

15 カタルーニャの義勇兵（voluntaris catalans）という表現は、最初はスペイン・モロッコ戦争（1859-1860）でスペインの兵士を援助したカタルーニャの兵士を指していた。後に、第一次世界大戦でドイツ帝国に侵略されたベルギーなどを援助する

ため、フランス軍に入って連合国と共に戦ったカタルーニャ人たちのことを指すようになった（なお、第一次世界大戦中、スペインは国家として中立を守っていた）。この詩は、バルセロナ生まれのモデルニスモ文学者イグナシ・イグレシアス（Ignasi Iglésias, 1871-1928）によるもので、カタルーニャ・ナショナリズムの指導者が主催したイベントで朗読されたり、それに関連した雑誌などに掲載されたりした（初出は*La Nació*, II-64, 1916/10/14, p.4; *Gent Nova*, XVIII-783, 1916/12/2, p.5など）。

16 小銃兵の第十四大隊のことである。

17 リェイダ（Lleida）は、カタルーニャの主要都市の一つである。現在のリェイダ県の県都。スペイン語表記はLérida（レリダ）。

18 ヨーロッパ諸国をはじめ世界で文明開化した国々の人民と同様、「すべての民主的権利および自由を享有できる市民」の意味と解釈してよかろう。

19「四本縞（les quatre barres）」とは、黄金地に四本の赤の縞で構成されている、カタルーニャの旗の愛称である。現在は、昔に地中海国家として発展したアラゴン連合王国の領域だった地域でも、様々なバリエーションを伴ってそれぞれの紋章や旗に使われている場合が多い。

20 この段落の内容は、当時のヨーロッパで広がりつつあったファシズムと、労働運動を含んだ民主主義思想の衝突を想定したものであろう。

21 主にイギリスとフランスの不干渉政策について述べている。スペインにおけるイデオロギーの紛争をイベリア半島に限定するため、内戦勃発の直後にヨーロッパ諸国の不干渉委員会が成立した。これで、国際的情勢は、事実上イタリアやドイツの援助を得ていたフランコ側に有利なものとなった。

22 本書はこれで完結している。1938年2月頃の時点だと思われる。その後、フランコ軍がテルエルを人民戦線から奪い取り、エブロ川の戦いを経てカタルーニャが陥落し、間もなくマドリードも陥落することで、1939年4月1日にフランコ軍の勝利と内戦の終結が確定した。五ヶ月後にヨーロッパで第二次世界大戦が始まり、内戦で破壊的な被害を受けたスペインは枢軸国を応援しながらも不参戦を表明した。戦後の独裁政権は、フランコが1975年11月20日に死去するまで四十年弱続いたのだが、早い段階から自治憲章が廃止されそれぞれの言語なども禁止されたバスクとカタルーニャでは、社会階級を問わず、フランコ体制に対する不満が最も高かった。（Tuñón de Lara, Manuel, et.al. *La guerra civil española: 50 años después*. Barcelona: Labor, 1989）